

令和元年6月13日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370935

研究課題名(和文) ハワイにおける「新一世」日本人の「居住空間」 - 国際移動とジェンダーの視点から -

研究課題名(英文) The community space built by Japanese new first generation in Hawaii

研究代表者

影山 穂波 (Kageyama, Honami)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：00302993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ハワイにおける戦後移住の日本人の「居住空間」を国際移動とジェンダーの視点から明らかにすることである。戦後最初にハワイに移住したのはGHQの軍人・軍属と結婚した「戦争花嫁」であった。当時の雑誌記事などには、多様なまなざしが表出されているが、ライフヒストリー調査からは、多くの困難に直面しながらも前向きに生活を営んできた姿が明らかとなった。ハワイで展開される日本人女性を中心としたネットワーク活動の中には、日系人・新一世日本人の心のよりどころとして日本の桜を位置づけ、植樹を推進する活動も展開されていた。調査からは活動を通して居住空間を認識し、その形成にかかわっていることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義はハワイに戦後移住した「新一世」の「居住空間」をジェンダー視点から可視化することにある。「戦争花嫁」や国際結婚など、第二次世界大戦後に移住した日本人を研究対象とすることは、多様なスケールにおけるジェンダー化の様態を可視化する可能性を持っている。

また「居住空間」の概念でジェンダーの視点からネットワーク調査、ライフヒストリー調査を用いて都市空間を検討することにも意義がある。「居住空間」概念を持ち込むことで、生産空間と再生産空間に機能分化されていた都市空間を、両者が接合されたものとして再定義していくことができ、都市空間とジェンダーの関係を明示していくことができる。

研究成果の概要(英文)： In this study, I focus on clarifying how Japanese women living in Hawaii built their community space from the view of international migration and gender. One result that became noticeable involved “War Brides” (after WWII, the Japanese women who married soldiers and other military-related personnel stationed in Japan, and then migrated to the U.S - including Hawai’i). Through an analysis of news articles of that time in Japan, it became apparent that the War Brides were stereotype with a variety of mainly, negative images. Results of interviews made is clear that despite many difficulties, these women have been living positive, fulfilling lives. Another result involved one of the Japanese women’s networks which promoted cherry blossom tree planting - the flower which signifies the heart of Japanese people. Participating in these activities contributed to the building of their community space.

研究分野：人文地理

キーワード：ジェンダー 居住空間 国際移動 新一世 ハワイ 戦争花嫁

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の都市空間は、近代以降機能的に分化され、ジェンダー関係を投影しながら生産されてきた(吉田 2007, 影山 2004)。こうしたジェンダー構造が国際移動により移住した人々にどのように影響を与えているかという問題関心のもと、ホノルルにおける調査を実施した(影山 2010 a, 2010 b)。日本出身の女性たちは、移住した時期、社会階層により多様に存在し、それぞれの特徴を持つ空間がハワイにおいて形成されてきた。資本と労働の移動に基づきグローバルなスケールで日本人の移住を検討すると、そのジェンダー構造が経済構造の変化に影響を受けながらホノルルの空間構造に組み込まれていくことが分かる。影山(2010 a)では、戦後移住の「新一世」と呼ばれる日本人の位置づけの一面を戦後移住の日本人を対象に発行されたイースト・ウェスト・ジャーナルの連載記事から分析した。女性たちの社会進出は日本以上に進んでいたが、課題が山積していることも明らかになった。また影山(2010 b)では、日本人女性が築いているネットワークに参加し、その活動が空間形成に及ぼす影響を検討した。これらの研究に基づき、本研究では、戦後移住の日本人を移住の形態とジェンダーに注目し、そのネットワークとライフヒストリーから「居住空間」を探る。日本人を中心に展開されるネットワークの形成は、地域の課題を考察する機会を提示するとともに、日常生活の充実のための活動の展開によりローカルな空間の創造につながる。一方、活動の中で女性たちが日本的ジェンダー役割を再生産している側面も見られる。ハワイにおける「居住空間」とそこに作用する資本と政治の力による動向を留意し、権力作用としてのジェンダー関係に注目することで、都市空間とジェンダー(影山 2004)の関係は明らかになる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ハワイにおける戦後移住の日本人の「居住空間」を、国際移動とジェンダーの視点から明らかにすることである。戦後に移住した「新一世」日本人は、日系人の多いハワイ社会において、少なからぬ影響を与えてきた。そして国際結婚、日本企業の投資、ハワイでの起業・就業などを通して、「居住空間」を形成してきた。その過程を日本人ネットワークとライフヒストリー調査から検討する。ハワイを移住先に選択した日本人の動向から、日本社会とハワイ社会の生活をジェンダー視点から可視化するとともに、ふるさとを創造することにもつながる「居住空間」を検討するものである。

3. 研究の方法

本研究を遂行するにあたり、以下の4つの調査を進めた。(1)戦後移住した「戦争花嫁」、国際結婚した女性、ハワイで起業したり就業したりしている女性、という3主体の女性たちのライフヒストリーの聞き取り調査である。(2)一つ目の主体である「戦争花嫁」について詳しく調べるために安富(2000, 2001, 2002)を参考に1945年から1960年までの資料を中心に、雑誌・新聞などの記事を分析した。(3)影山(2010 b)を発展させるために、彼女たちが現地で形成するネットワークへの聞き取り調査を進めた。(4)近年の動向として、日本とハワイをつなぎながら、ハワイで活動が展開されているネットワークが見られるようになった。例えばハワイシニア協会、ハワイサクラ基金などの活動である。そこで本調査ではハワイサクラ基金の動向について調査を実施した。以上の研究より戦後の日本人女性たちの生活、またネットワークを通して築いてきた「居住空間」とジェンダーとのつながりについて検討した。

4. 研究成果

(1) 戦後の日本人女性のハワイへの移住

本研究では、ハワイにおける戦後移住の日本人の「居住空間」という視点から多様な動向に注目してきたが、注目すべき存在の一つは「戦争花嫁」と位置付けられてきた女性たちである。彼女たちは、第二次世界大戦後日本を占領したGHQの駐留軍人や軍属(G.I.)たちと結婚した人たちである。駐留兵の大半をアメリカ軍が占めたこと、ハワイをはじめ、多くの日系二世が駐留していたこととも関連して、4万人以上の女性たちが「戦争花嫁」としてハワイを含むアメリカへわたっていった。結婚の経緯も多様であるし、その後の人生も様々である。現在80~90歳代を迎えた彼女たちからの聞き取り調査は緊要な課題となっている。2014年から2018年にかけて5人を対象に詳細なライフヒストリー調査を実施したが、いずれも困難に直面した時代を記憶にとどめながらも前向きな人生を送っていた。義理の家族や周辺コミュニティとの関係、就業について、子育てについて、退職してからの生活、現在の動向と、ライフステージに応じて課題を乗り越えており、時代や環境に翻弄されながらも自立した精神を持ち続けていた。

(2) 記事にみる「戦争花嫁」の表象

1924年の排日移民法により日本人のアメリカへの入国は禁止されていたため、戦後日本人女性と日本に駐留したGHQのG.I.とが結婚しても、そのままアメリカへ移住することは不可能であった。1947年になりようやく条件付きで一部の女性たちが渡米を許可されることとなった。ただし入国の可能期間が非常に短く制限されていたうえ、上司の承認と安心できる保証人がいること、身元調査を行い許可が下りなければいけないという厳しいものであった。広く一般にアメリカへの入国が可能となるのは1952年からである。

1945年から1960年ごろまでの「戦争花嫁」に関する雑誌や新聞記事を分析すると、時代によ

り論調が変化している。1940年代後半は、厳しい制限の中で正式に結婚できた例は少ない。そのため正式に結婚できた女性たちに対して向けられる目は憧れまじりの揶揄的なものであった。有名女優が結婚したことは華やかな事件として記事になるが、破局したことでやはり不幸になった、無理があったのだと結論付け、異国籍間での結婚そのものもスキャンダラスに語られるようになる。1952年以降、急速に関連記事が増加する。その多くは国際結婚に批判的なものである。「日本娘を妻にするな」(『サンデー毎日』(1953/6/23))「アメリカ兵を夫にするな」(『週刊朝日』(1953/7/5))などとG.I.も日本人女性も結婚の対象とすべきではないといった記事や、破綻した結婚生活を描いた記事などが増えていくのである。幸不幸な状況が多様に描かれるようになるのは1955年ごろからだが、豊かなアメリカ生活へのあこがれは抱きつつも、言葉の違い・文化や慣習の違いにより不幸な生活を送るのではないかという感情が含みこまれて描かれていることが多い。1960年を過ぎると戦争花嫁という言葉では語られなくなっていく。時代による変化はみられるが、いずれにしても日本人女性がアメリカ人男性と結婚することに対する複雑な思いが投影されているといえよう。そこには日本の家父長制的なまなざしが含みこまれているのである。

(3) 「新一世」日本人のネットワーク

ハワイにおける日本人のネットワークは多様に展開されている。ハワイへの移住により生活基盤を移す一方で、日本人としてのアイデンティティを強く持ち続けている人も多く存在する。とくに国際結婚をしたことで、英語あるいは夫の母国語を中心とした生活環境にある女性たちは、日本語の話すことのできるネットワークが重要な意味を持つことが多い。様々な人々と出会う中で、問題や課題を見出し、さらなる活動に参加し発展させる人もいる。一方で、ハワイに居住しながらも日本的なつながりを中心に生きている人も見られた。日系人のネットワークとは異なる「新一世」ネットワークが数多く展開されており、日本語を媒介としてハワイへのアイデンティティを強める例もみられる。近年、ハワイにいる日本人だけが主体となるのではなく、日本とハワイをつなぎながら活動を展開する例も登場している。2007年に発足したハワイシニアライフ協会や、2017年に活動を開始したハワイサクラ基金などである。

ハワイシニアライフ協会は、ハワイで充実した生活を送れるように、興味を持てる活動に参加する機会を提供している。気功やウクレレレッスン、ハイキングから俳句や詩吟の会など多様な活動が展開されているのである。この活動の特徴は、ハワイに居住している人だけではなく、長期滞在している人も、観光で訪れた人も参加できることにある。さらに日本にも拠点を作り、ハワイが好きな人たちが集まる場となっている。ハワイを拠点にネットワークを広げることで、日本とハワイをつなぐ役割を果たしているのである。

(4) ハワイにおける日本的なるもの：「桜」の植樹運動

日本からワシントンに桜が植樹された1912年から100年後の2012年「桜寄贈100周年事業」日米交流として、ワシントンからアメリカ各50州に桜を植えるプロジェクトが行われた。この動向に呼応して、日本からハワイに桜を送るプロジェクトが開始し2012年2月、ハワイ島ワイメアの桜祭りでは、5本の桜が植樹された。これを契機に2012年、桜の苗木を植樹して桜並木を作ろうという桜並木委員会が結成された。熱帯域に位置するハワイの中でも、ハワイ島には標高が高く寒冷な地域もあるが、オアフ島で桜を植樹できる場所を探すことは困難であった。しかしメンバーが尽力し、2016年オアフ島ワヒアワに位置するヘレマノ・プランテーションに2016年2月にセンダイヤ桜12本が植樹されることとなった。さらに2016年11月には、アメリカ太平洋艦隊の中核基地であるキャンプ・スミスにも桜が植樹された。その状況を新聞では「日本とハワイの日米友好の証」と述べている(The Hawaii Houch2016/11/18, Hawaii Pacific Press 2016/12/1, 高知新聞2016年12月22日)。

植樹運動を進めていた活動の中心となっている女性Sさんにとって桜の植樹は大きな意味を持つ。彼女が時々世話をしている日本人高齢者の中には「戦争花嫁」としてハワイにわたってきた人が少なくない。「戦争花嫁」の中には日本に毎年のように遊びに行く人もいるが、中には、日本にいた親類との関係を断絶してしまった人もいる。いずれにしても、3月末から4月にかけて、桜のタイミングに合わせて日本に帰ることは容易ではない。そんな日本人の女性たちに沖縄桜ではなく、薄墨の日本桜を見せてあげたいというのが彼女の願いである。植樹の活動に積極的にに関わり、キャンプ・スミスへの植樹の話が出たときに彼女が考えたことは、これこそが草の根レベルでの日米の交流に「つながる」ということであった。

ハワイ桜並木委員会を中心に桜の植樹を進めてきた活動が、2017年8月に非営利団体ハワイサクラ基金として新たに発足した。この予算を用いて、植樹から育成まで桜を見守る活動が開始された。最初に行ったのが桜守を日本から呼ぶことであった。植樹した桜の剪定を行うとともに、すでに根付いている沖縄桜の育成に関するアドバイスも受けた。こうした活動の中から、桜をめぐる活動は、日本的なる桜を植樹する一部の人々による活動から、広くハワイにある桜をいつくしむための会へと少しずつ変化しながら、ネットワークを拡大している。桜は「そこにあるべきものと考えてきた日本人にとってかけがえのないものである」というハワイサクラ基金のメンバーの語りは、海外に生活をする日本人の心のよりどころを生み出している意義を示すものといえよう。

日々の生活の中でのネットワークの形成とともに、「桜」という形あるものが精神的支柱とし

て果たす役割は、ハワイにおけるふるさとづくりへとつながっているのである。

(5)「新一世」日本人の「居住空間」

日本からハワイへの移住は戦後の制限された形によるステレオタイプ化されたものから多様で自立した形へと変化している。「戦争花嫁」とラベリングされた女性たちが直面してきた困難に対して乗り越えていく前向きでたくましい生き方と、彼女たちの存在を意識しながら桜を日本的なるものにとらえ植樹運動を展開している生き方は、ともに自らの生きる空間をいかにより快適に充実したものとするのかという「居住空間」の形成への寄与と言えよう。これは心のよりどころとしての場所を作ることであり、移住した地でふるさとを作る活動なのである。

<引用文献>

- 影山穂波、古今書院、都市空間とジェンダー、2004
影山穂波、ハワイにおける戦後移住の女性たち 連載「がんばるハワイの新一世」から、椋山女学園大学研究論集 社会科学篇、41巻、2010a、143-152
影山穂波、ハワイにおけるネットワーク形成と女性の役割、お茶の水地理、50巻、2010b、80-91。
安富成良、「戦争花嫁」と日系コミュニティ(1)ステレオタイプに基づく排斥から受容へ、嘉悦女子短期大学研究論集、43巻1号、2000、177-199
安富成良、「戦争花嫁」と日系コミュニティ(2)ステレオタイプに基づく排斥から受容へ、嘉悦大学研究論集、44巻1号、2001、45-61
安富成良、「戦争花嫁」と日系コミュニティ(3)ステレオタイプに基づく排斥から受容へ、嘉悦大学研究論集、44巻2号、2002、55-82
吉田容子、古今書院、地域労働市場と女性就業、2007
『サンデー毎日』1953年6月23日
『週刊朝日』1953年7月5日
高知新聞 2016年12月22日
The Hawaii Houch 2016/11/18
Hawaii Pacific Press 2016/12/1

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

- 影山穂波、ハワイと愛媛の姉妹都市交流が生み出す空間 愛媛ハワイ会の活動を中心に、椋山女学園大学研究論集、45巻、2014、1-11
Honami Kageyama, Community Building in Naha Shintoshin, Okinawa From the View of Gender Studies, Geographical Review of Japan Series B 89(1), 2016, 1-6.
影山穂波、ハワイの桜と新一世の女性たち、椋山女学園大学研究論集、49巻、2018、119-129
影山穂波、学会展望(2014年1月~12月)社会地理、人文地理、67巻3号、2015、32-34

[学会発表](計3件)

- Honami Kageyama: The representation of War Brides in Japanese Media Discourse. 2014年8月. IGU(International Geographical Union) pre conference (ワルシャワ大学).
影山穂波：戦後の雑誌にみる戦争花嫁の表象. 2015年9月. 日本地理学会秋季大会「ジェンダーと空間/場所」研究グループ研究発表(愛媛大学)
Honami Kageyama: The Transforming of the Nakamura Yukaku Red Light District in Nagoya ~from sexual service to welfare space~. 2017年8月. 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies(NOVA大学、リスボン)

[図書](計3件)

- 影山穂波、ジェンダー、藤井正・神谷浩夫編著『よくわかる都市地理学』ミネルヴァ書房、2014、
影山穂波、赤線地帯、田園都市・ニュータウン、米軍住宅跡地の都市計画、少子化問題と子育て支援、藤塚吉浩・高柳長直編『図説日本の都市問題』古今書院、2016
吉田容子・影山穂波、ジェンダー、『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018、563-574

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。